

会 議 録

会議の名称	令和4年度第5回富士見市社会教育委員会議
開催日時	令和4年11月18日（金）午後7時00分～8時30分
開催場所	中央図書館 集会室
出席者	古澤立巳議長、佐々木真理子副議長、京谷恵子委員、吉田徹子委員、渡邊知広委員、吉田和江委員、富士伸委員、事務局
欠席者	荒川照子委員、蘇武伸吾委員、内海幸一郎委員
公開・非公開	公開（傍聴人 0人）
会議次第	1 議長あいさつ 2 協議事項 3 その他
会議資料	・定期刊行物 ・資料1 『『つながり』について』
会議録確認	古澤立巳議長

会議内容

1 議長あいさつ

【議長】 「つながり」に必要性やメリットについて、各委員の立場から感じていること、思っていることなど、ご意見をいただければ。

2 協議事項

【議長】 事務局から資料の説明を。

【事務局】 資料に基づき説明。

【委員】 特定の人が団体の運営についてイニシアティブを持ってしまっており、新しく参加する人たちの入り込む隙がない、という例を見かける。そうなってしまうと、旧態依然とした組織になってしまう。新しく参加してくれた人がいても、離れていってしまう。寛容性が重要だと感じている。

【議長】 ずっと携わっているということは決して悪いことではないが、前に出すぎてしまうと、次の人がなにも言えなくなってしまう。一緒に活動することが出来なくなってしまう。新たな参加者によって、新しい発見があるという考え方が必要。「今まではこうやってきたから」ではなにも進歩しない。

【委員】 多くの委員が賛同している。私たちの世代がそう感じるということは、もう少し前の世代からこの事態が起きてしまって、新しい世代の参画を阻んでしまっているということ。どうしたらいいか、具体的には思いつかないが、対処していかなければならない問題なのではないかと感じた。

【委員】 同世代のつながりだと、気持ちや環境についてお互いに理解しあうことができるので安心感を得ることができ、成長にもつながっている。世代をこえて、縦のつながりをつくる工夫もしていく必要があるとは考えている。ただ、そういう場を設けても、来る必要のない人、たとえば委員のみなさんのように日頃から情報へのアンテナが高く積極的な人は参加するが、来た方がいいと思うような人が来ない。なかなか参加しない人に対して、いかに参加してもらおうかということを考えていたが、それでは全体の平均値は上がらないということに最近気付いた。参加する人、アンテナの高い人たちでまずは活動して求心力を高めて、より多くの人を巻き込んでいく方法がいいのではないかと考えている。例えば他の審議会に参加した時の話だが、教育が遅れている子に対してどのような対応を取るか、という話になった。しかし遅れている子ばかりに対応していると、他の子たちの成長に繋がらないのではないか。もちろん勉強ができる子たちばかりに合わせても、ついていけない子たちが出てしまうので、それはそれで問題がある。難しい問題だと思うが、つながりについて考えると、まずはできる人たちで活動して、より多くの人を巻き込んでいくのがいいのではないだろうか。行政に発信の場とは何かと問うと、市のホームページと公民館だよりだという答えが返ってくるが、ホームページや公民館だよりが情報源の人たちでまずは活動を盛り上げる。今はSNSが発達しているので、興味がある人は、自分で検索して

ホームページを見ると思う。検索した時にしっかりヒットするよう、準備としてホームページ上で情報発信をしっかり行っておくのがよいのではないかと考える。

【委員】 集団全体のパフォーマンスを上げるために、ボトムの底上げをしつつもトップラインを伸ばしていくことで、よりパフォーマンスを上げていこう、トップラインに全体を引き付けていこう、というお話と理解した。そして、情報の発信についても様々な手法が考えられるが、まずは発信するためのコンテンツそのものの魅力を高めないと、巻き込みを図ることはできないというお話かと理解した。また寛容性が重要という意見があった。同質性が保たれていることに心地よさを感じてしまうため、同じ年代、同じ価値観の人との交流で終わってしまう。しかし、異質なものを、自分になかったものを取り入れていくことが新たな気付きを生んだりすることがある。自分にとっては居心地の悪い変化であるかもしれないけれど、それも楽しむ度量を持って活動していく必要があるのかもしれない。そのような意味では、つながりを考えていく上で寛容性はとても重要なのだと感じた。また、事務局の説明の中で一つ違和感を持った箇所がある。配布された資料のなかで、「居場所ができる」を最後に配置しているが、これはここでいいのだろうか。2番目の枠の中のものではないかと感じた。居場所が出来て、その中で心が温かくなる、感じる、気付くということがあって、最後の枠に繋がるのではないかと考える。

【事務局】 他者とつながることで温かさを感じ、それが居場所になると考えたが、委員ご指摘のとおり、2番目の枠の中にも配置可能かと思う。

【委員】 最近学校応援団の関係で花壇の植え替えを行ったり、学校運営支援者協議会に参加したりした。地域の方とPTA役員、学年委員の方が参加していた。そこで今はPTA本部と学年委員しかないと聞いた。私がPTA役員をやっていたときは、本部があって、そこから学年委員や環境委員など色々な委員が組織されていた。今の保護者は今の保護者でできることを考えていて、PTAも大きく組織を編成し直していた。また、役員になった人で、1歳になっていないくらいの赤ちゃんをおんぶしながら一生懸命作業している人がいた。赤ちゃんがかわいそう、と思ったが、お母さん本人は「大丈夫ですよ」と平然としていた。私たちの時は、それくらい小さい子がいると免除してもらえるのが当たり前、助けてもらうのが当たり前だったが、今はそうではないようで、とてもパワーを感じた。来ているお母さんたちはみんな一生懸命やっていて、今の保護者は今の保護者の方法で活動している。ただ、他の地域活動に誘っても、おそらく参加はしてくれないと思うが、今まさに変化の時を迎えているのではないかと感じた。若い人たちはSNSを上手く使いこなすので、そういうツールを使って自分たちの仲間を上手に引き寄せるのだと思う。ラジオを聞いていたら、いわゆる「ママ友」について、必要という人もいるが、不要と考える人もいるという話があった。学校からの連絡は一斉メールで送られてくるので、他の保護者に聞く必要もないし、子どもが手紙等を出し忘れることもない。だから「ママ友」も必要ないという意見があるとのことだった。今、私たちが当たり前と思っていた考

え方で若い人たちを巻き込んでいくのは難しいのではないかと。若い人たちはどう考えているのか、聞いてみたいと思った。また、なにかに参加したいと思った時に、分かりやすく知ることが出来る環境が必要。若い人だけに限った話ではなく、年配の方もつながりを持ちやすい方法を考えていく必要があると考えている。

【事務局】 P T Aについては、複数の学校で大幅な組織改編が行われていると伺っている。

【委員】 私の娘の友人から聞いた話がある。子どもを育てるために働いている。そのために子どもを放課後児童クラブに預けている。しかしそれに伴い「ママ友」からたくさんメール等の連絡が来てしまうとのことだった。昼間外で働いている分、夜、家では子どもと関わる時間をしっかり確保したいのに、「ママ友」との付き合いのための連絡などに時間を取られて煩わしく、何のために働いているのか。自分なりの子育てをしたいので、「ママ友」は必要としていない、ということだった。

【委員】 連絡手段が発達している分、今の保護者や子どもたちは苦勞も多いと思う。子どもも笑って済まされない問題が増えているように感じる。

【委員】 資料には「居場所が『できる』」と書いてある。居場所はとても大切。また、居場所を「つくる」というだけでなく、自分が持っている居場所をなくさないようにすることも重要だと感じている。私の友人が脳梗塞で倒れて、約1年ぶりに復帰してきて活動で再会した。半分麻痺が残ってしまい、車椅子を使って生活している。脳梗塞で倒れる前は様々なところで一所懸命活動されていた方であるが、そういった活動が一切なくなってしまったそう。そうすると段々気が沈んでしまい、居場所もひとつ、ふたつと段々減っていった。ご家族が付き添ってくれば私たちの活動に参加できるということで、誘ったら来てくれた。またその時は中央図書館の視聴覚ホールで活動したのだが、こういう施設であれば来ることができるので、一緒に活動したい、仲間に入れてほしいとのことで、また一緒に活動を始めた。居場所をつくるのではなく、固持するというのも大切なことだと感じた。

【議長】 資料の「つまり…？」以下のまとめも確認いただきたい。

【委員】 これだけ読むと間違っていないと思うが、これまで各委員から出された話を考えると、何か合っていないように感じる。個々の活動の違いが反映されていないように感じる。「居場所ができる」はどこに入るのか、という話もあった。例えば子ども食堂でもヤングケアラーなどの講演会に参加したりするが、どこに行っても「居場所」がキーワードになっている。子供だけでなく大人も同じで、自分はここにいてもいいのだ、と思える場をつくるのが大事ということがよく言われている。もう一度、この「居場所」については噛み締めなくてはいけないと思った。ヤングケアラーの方のお話を聞いていると、居場所を保つことは思っている以上に難しいことなのかもしれないと感じた。なにを、どうすれば、自分が前に進めるのかという指針がなかった、というお話を聞いた。だから自分がヤングケアラーの方たちの居場所をつくりたい、とのことで、状況等を理解している人が居場所をつくるという話だった。難しいが、居

場所については全ての段階に必要なことなのかもしれない。「居場所」は富士見市の中でも聞くし、本当によく耳にする言葉。ただの場所ではなく、「自分はここにいてもいいんだ」と思える場所が「居場所」だと理解している。その「居場所」を持つことができない人がいるということが問題なのかと思う。

【議長】 世代を問わず、係わろうとしてきた人がきちんとそこに居場所を持つことができる、ということがつながりであり、大切なことなのではないかと思う。

【委員】 「つまり…」以下について、その通りではあるのだが、今一つ何か足りない。問題を感じていない人に対しては、こう書かれてもあまり伝わらないのではないだろうか。確かにその通りではあるのだが、解決にはつながっていないように感じる。「居場所がある」ということが本当に大切であるなら、そこを強調するように書けばまた違ってくるかもしれない。例えば学校では同じ学年の、横のつながりが多いが、社会に出ると様々な年代の人がいて、その係わりの中で自分のポジションを得ることができる、ということができればいいのではないだろうか。

【議長】 この箇所について、次回の会議でまた検討事項としたい。資料の2枚目についても確認したい。まずは事務局より説明を。

【事務局】 資料に基づき説明。

【事務局】 前回の会議の委員のお話の中で、子ども食堂ではあるが子どものためだけにやっているわけではなく、子どもが手伝ってくれることもある、という話があった。これは、どのような働きかけをした結果なのか、伺いたい。手伝いを募集した結果なのか、参加者から「やってみたい」という声が上がったのか。

【委員】 親が参加するときに子供ども連れてきて、子どもも係わってくれるようになった。私たちと一緒になにかをする、ということが楽しい様子。まずは親が参加して、子どもを連れていきたいと思って、実際に連れてきてみたら子どもも楽しかった、という流れだった。親が、自分も経験してみたかったし、子どもにも経験させてみたかった、とのことだった。

【事務局】 子どもを連れて行ってもいいかと相談できる雰囲気だということ、そしてそれを受け入れてもらえるということ、これも一つのハードルの低さなのかと思う。会議冒頭で委員より長く経験している人が前に出すぎてしまい、新しい人が参加しにくい、という話があったが、オープンな組織であるということは、世代をこえたつながりづくりという観点において大切なことなのかもしれない。

【委員】 私たちの活動は作業も多く、また始まってから日も浅いので、人を受け入れやすい活動ではあると思う。受け入れているうちに、自然に世代が代わって、いずれは私も一人の参加者として参加したいと考えている。子ども食堂もそれぞれで、活動が続かないところもある。若い人たちはあくまで参加者、とはっきり分かれている。

【議長】 活動されている方の先への思い、この活動はこうあって欲しいという姿、そしてそれを実現させるための、つながりづくりやきっかけづくりも大切だと思う。

【委員】 いずれ自分が参加者となるためには、活動をつなげていく必要がある。本当にいろいろな子ども食堂がある。子どもだけを対象にしているところもあるが、私たちは全世代を意識して活動している。食堂を開けていた時は、高齢者の方から子どもまで、楽しく開催できていた。

【委員】 子どもを巻き込むということに関連して、新河岸川沿いのコスモス街道について。もともとは地域の方が苗を植えるところから始まった。段々と活動が広がり、本郷中学校の生徒たちも種を植え、苗を育てるようになった。当時は地域文化振興課が係わって活動を広めていたが、最近は中学生の参加もなくなってしまった。こういった事業を継続できるよう、行政に団体を補助してもらえたら。いい事業ではあるが、団体には高齢者の方が多く、積極的に動くことは難しい。子どもたちを巻き込んでできる活動なので、こういった活動をひとつひとつ大事にできたらいいのではないか。

【議長】 世代をこえたつながりづくりのため、行政に対する要望を提言するのもいいかと思う。次回の会議では、今一度今回の資料について検討を進めたい。また諸活動について、具体的に取り上げて、より詳しく話を伺えれば。

【事務局】 委員から、若い世代の方に実際に話を聞いてみたい、という意見があったが、どうするか。

【議長】 会議の場に来ていただくと委縮されてしまうのではないかと思う。

【事務局】 では委員各位、可能な範囲で周囲の方に話を伺ってきていただければ。

3 その他

【議長】 今後のスケジュールについて、年内はあと1回開催できればと考えている。1月下旬から2月上旬の会議で具体的な提案を検討し、3月の会議で提言書の素案を作ることができればと考えている。そしてその素案を4月、5月の会議で確認して、5月の下旬に提出できれば。月1回開催という、忙しいスケジュールになるが、委員各位ご協力を頂ければ。

次回会議日程

令和4年度第6回会議

日程：令和4年12月12日（月）午後7時～

場所：中央図書館 視聴覚ホール